まち中でネーチャーライフを体験 水辺が育むエコタウン

都心から北に約25km、埼玉県越谷市の南東部に位置する越谷レイクタウン。
2008（平成20）年3月にＪＲ「越谷レイクタウン」駅の開業と同時に「まちびらき」をした。
このニュータウンでは、まちと一体で計画された大きな調節池を中心に、
水辺で快適な都市生活を送るための、UR都市機構によるまちづくりが進んでいる。
豊かな水と緑に囲まれたレイクサイドでは、自然と共生した新しいコミュニティーが生まれている。

★以外の写真＝的野弘路　取材・文＝船木麻里

老若男女問わず楽しめる「アクセスディンギー」は、風の向きや強さに合わせて帆の角度を操作して動かす

Case 2

越谷（こしがや）レイクタウン

埼玉・越谷市

「ディンギー」と呼ばれる小型ヨットから、子どもたちのこぼれんばかりの笑顔と大きな歓声が、夏の暑さを吹き飛ばす。

「風がぼくらを運んでくれるんだ。最高だよ！」

うれしそうに話す、小学5年生のアニセイ大雅（まさひろ）くんは、弟たちとディンギーに乗ったりカヌーに乗ったりと大忙しだ。ディンギーの舵（かじ）を取る姿も様になっていて、とても初体験とは思えない。

7月のある日曜日、越谷レイクタウンのシンボル「大相模調節池（おおさがみちょうせつち）」の湖畔で行われた「越谷レイクタウンフェスティバル」。地元近隣の小学生やその家族およそ50人が集まり、ディンギーやカヌーなどの水上スポーツを楽しんだ。

イベントで使用しているディンギーは、安定感に優れた「アクセスディンギー」と呼ばれるもので、操作しやすく、年齢や経験を問わず楽しめるのが特長だ。

水辺の環境を考える機会に

イベントを主催したＮＰＯ法人「セイラビリティ越谷」の代表理事、久川雅大（くがわまさお）さんは「このイベントは、ただ楽しいだけではありません」と言う。「水辺のアクティビティーを通して自然と親しみ、自然環境を維持していく意識を高めることが目的なんです」。

午前中には、参加者全員で調節池を巡る遊歩道「レイクサイドウォーク」を歩きながら、池やビオトープに棲（す）んでいる生き物の観察や、池の水質調査も行った。周辺一帯の自然の状態を知る学習体験も、イベントプログラムに入っているのだ。水辺にはナマズやヌカエビ、ギンブナなどが見つかる。「多くの種類の生き物がいてびっくりした」と話す子どもたちの姿に、久川さんは「このイベントが、自然の生態系を守ることの大切さに気付くきっかけになれば」と期待する。

この地域は元荒川（もらあらかわ）や中川（なかがわ）などの河川に囲まれ、古くから大雨による洪水被害に悩まされてきた。上野・不忍池（しのばずのいけ）の3倍の広さがあるこの調節池は治水対策として機能し、平常時は水の流れをコントロールして、水質や水量を保つ仕組みになっている。同時に暑い日には調節池からの冷気が周辺に広

セイラビリティ越谷の小学生スタッフは、参加者のライフジャケット着用を手伝ったり、ディンギーの操作を教えたりと大活躍

越谷レイクタウンの全景イメージ

★

まちの真ん中に周囲5.7kmの調節池がある。周りには遊歩道「レイクサイドウォーク」が巡らされ、自然観察を楽しみながら2時間ほどで1周できる（上）。イベントを主催したNPO法人セイラビリティ越谷の代表理事、久川雅大さん（右下）。“コンパクトシティー”として設計された越谷レイクタウンの全景イメージ（左下）

水辺にある豊かな自然が子どもたちの学びの場に

水質検査の合間に自然観察。珍しい鳥や虫を見つけたり、葦（あし）で草笛を作ったりと、子どもたちは思い思いに自然を楽しむ

午前中のイベントプログラムは「川の好感度チェック」。炎天下の湖畔を歩きながら、湖の水質検査を行った

★

ニュータウン内の道路には、自転車がスムーズに走ることができるよう専用レーンが設けられている

がり、ヒートアイランド現象を抑制するクールスポットとしての効果もある。「とくに夕方になると、打ち水をした後のように涼しくなります」――。毎日のように湖畔を訪れる久川さんはこう話す。

機能面ばかりではない。池の存在そのものが住民の憩いの場になっている。イベントの参加者も、「このあたりは多くの河川に囲まれて〝水郷こしがや〟と言われています。その割には水に触れる機会が少なかったので、子どもたちと水に親しむ経験ができるのはとても貴重で楽しいことですね」と笑顔で話す。

コンパクトなまちづくり

越谷レイクタウンは、まちのつくりそのものが環境負荷の軽減を目指したエコタウンとなっている。最寄りの駅をはじめ、日本最大級のショッピングモール、保育園などの公共施設が、住宅から徒歩15分圏内にある。また、道路には「自転車専用レーン」も設けられ、住民はクルマに頼らず生活できるように工夫されている。コンパクトシティーの実現、調節池をはじめとした自然や生態系に配慮した環境の創造活動などが認められ、越谷レイクタウンは世界的にも高い評価を受けている。

久川さんは「これからは住民が『自分たちのまち』という意識を持って自分たちでまちを管理し、環境を考えてコミュニティーを形成していくことが課題です。ここを誰もが暮らしやすいまちにしていきたい」と語る。

現在、セイラビリティ越谷には30人ほどのスタッフがいて、イベントの運営や水辺の清掃などを行っている。そのうち小学生スタッフが6人。ディンギーの操作をマスターし、イベントでは初体験の参加者を先導する頼もしい一面をのぞかせていた。

久川さんは「水辺のスポーツを通して、教えることの喜びや、仲間と協力し合うことの大切さも学べるのです」と、子どもたちを見守る。こうした子どもたちが成長して地域コミュニティーの新たな担い手となってくれれば、水と緑に恵まれた越谷レイクタウンはより一層の成熟を見せて、さらに魅力的なまちへと発展していくに違いない。